（第３種郵便物認可）　2023年（令和5年）11月20日（月曜日）　讀　賣

読売歌壇

小池　光　選

ばあちゃんねおみみこわれたのと店員のかける言葉に孫が答える　神奈川県　露木　美子

【評】おばあちゃんは耳が遠くなった。店員のかける言葉がよく聞こえぬ。それでおさない孫が言う「おみみこわれたの」と。なんとも的確にしてやさしく、いい言葉である。

ゆかりのない保育園児らのうんどう会になぜか涙がこぼれて止まず　ふじみ野市　小林　久枝

【評】おさない子供たちが一生懸命に活動しているありさまは、なんのゆかりがあるわけでなくても、胸を打たれるものがある。思わず涙がこぼれた。とてもよくわかる心情。

原爆資料館を出でて泣きたる外国の少女を見ればわれも泣きたり　横浜市　古山　智子

【評】原爆資料館にはたくさんの外国人も訪れるという。胸に迫って涙した異国の少女。彼女と深く、深くこころがつながる。

二度三度火元戸締まりをたしかめてさあ行こう今日は仲よし会だ　小美玉市　松山　光

歌舞伎座の前通るとき昼の部の閉ねて出できし旧友と出会へり　稲城市　山口　佳紀

七十も違う幼と保育所の金網越しに会話が弾む　東京都　影山　博

中戸にて隣と行き来したころは栗飯行けば煮ころがし来つ　名古屋市　山守　美紀

夜の空ひとり寂しきクレーンは月捉えんと首を伸ばせり　大阪市　黒田　道子

児童らが楽しそうだな通学路明るい声が聞こえてきます　鳴門市　楠井　花乃

玄関に入れば吾家の匂ひする老いた夫婦の生きゐる匂ひ　竹原市　岡元　稔元

栗木　京子　選

定年の本を読みたる日は遠く九十の壁に挑む本読む　横浜市　芝　公男

【評】定年後の生き方や九十歳を迎える心構えなど、今はさまざまな指南書が刊行されている。作者は書籍から学ぶタイプのようだ。未知の体験への真摯な取り組みが伝わる。

手間かかり一円七つ出すわれとともに数えるレジの女性よ　千曲市　米沢　光人

【評】昨今はオンラインでの決済が増えているが、現金で支払いをする場合もある。急がせることなく、いっしょに一円玉を数えるレジの女性。七枚の硬貨が輝いて見える。

八冠を得れど頂上見えずとは窮めむとする意志すがすがし　寒留市　手島　愛雄

【評】八冠を達成した将棋の藤井聡太氏。つねに謙虚で向上心を忘れぬ姿勢に感服する。彼の目指す頂上を私たちも注視したい。

温度計今日は背伸びをしたがらぬ僕は一枚重ね着をする　横須賀市　笠原　隆司

赤蜻蛉前へ前へと飛びゆけりおれはそんなに急いでないぞ　我孫子市　林　雅則

若き日の人に貰いし花挿しの揺れる小窓はトイレの小窓　流山市　末広　照子

ラーメン屋出でて秋風青き空　けふ一日はまだまだ長い　我孫子市　森住　昌弘

ミサイルを全て花火に取り替えたら子等の歓声地球を救う　足利市　前田　佐和

虹消えし後のさみしさ国道に架かる歩道橋はずされし秋　小樽市　石田ちづる

その昔水で喧嘩のありし田も今は放置の草地となりぬ　深谷市　三上　通而

俵　万智　選

満月のドアノブぐんと手をかけて夜空の裏の色を知りたい　川崎市　山田香ふみ

【評】満月をドアノブに見立て、そのドアを開けた向こう側の景色を想像している。メルヘンチックな可愛らしさを持ちつつ、スケールの大きさが魅力だ。「ぐんと」が迫力と実感を伝えて効果的。

戦争を知る子供たちが増えているここでの「知る」は「わかる」ではない　大津市　佐々木敦史

【評】あえて無骨に説明口調で表現した下の句に、強い怒りがにじむ。子供たちは、永遠に理解できない理不尽にさらされている。

ぬくもりを消さないように渡される聖火みたいな焼き芋ひとつ　越谷市　あきやま

【評】なにげない一コマだが「聖火」の比喩がユニークにして的確。

あなたとの予定調和が好きだった鮭おにぎりを選ぶみたいに　東京都　音羽　凜

搭乗口前にて搭乗待っている土産物屋に積まれた土産　東京都　武藤　義哉

店頭に組体操を始めたる白組のトイレットペーパー　横浜市　山田　知明

たましいにやすりをかける優秀な人材として採られるために　狭山市　えんどうけいこ

まだ半分あると思ってる人生のほんとの中間地点は不明　オランダ　宮沢　洋子

植物のように根がある溜息をまた育てる心の土壌　高島市　宮園佳代美

「なんだろう」「なんだろうね」で終わらせず「なんですか」ってちゃんと聞く母　堺市　一條　智美

黒瀬　珂瀾　選

人間の命は何と壊れ易しあんなちいさな地雷に触れて　成田市　神郡　一成

【評】ほんの小さな武器によって人は死ぬ。その小さな命の価値の大きさは計りしれない。殺すな、殺させるなの声を世界に広めたい。

銭湯の帰りにとうふ買い足して鍋にしようぜ初雪だしね　札幌市　多米　淳

【評】湯上りの身にちらちらと降る初雪。鍋物が恋しくなる季節だ。家族か恋人か、夕食をともにする誰かに話しかける口調が、歌にほのかな優しさをかもし出しています。

パソコンといへども灯火親しむがごとき思ひぞ誤入力さへ　東大和市　板坂　寿一

【評】灯火親しむべし、と言えばかつては読書だったが、今やパソコンも大活躍。短歌を打ち込んでいるのでしょうか、不慣れな手つきでも、何かを学ぶことの喜びがあります。

円安で出稼ぎに行く若者が寿司の技術を蓄へてをり　水戸市　加藤木よういち

傷を持つZIPPOライター少しだけ俺は自分が好きな気がする　前橋市　ナカムラロボ

「天神さま」と書き置きひとつ卓にあり母の家出はいつもかわいい　千葉市　芍　薬

あをじろくほそき水素の炎にとろりまどろむごとき石英の管　宗像市　巻　桔梗

サッパリはよき副詞なり古本屋に本売りて二十円を受け取る　奈良県　若林　明良

恐らくは消ゆる限界集落に今年も秋の幟旗立つ　町田市　谷川　治

久々に会えば語れりお互いの夫の最期を心ゆくまで　大阪市　黒田　道子

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はりんご